

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 16 日現在

機関番号：24506
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2008 年～2011 年
課題番号：20249085
研究課題名（和文）小児医療における病院/在宅/地域/をつなぐ高度実践看護師クリニックのシステム構築
研究課題名（英文）Development of Advanced Nurse Clinic System to Link Child's Care among Hospital, Home, and Community
研究代表者
片田 範子（KATADA NORIKO）
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号：80152677

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：高度実践看護師、小児看護専門看護師、小児医療、在宅支援体制、高度実践看護師クリニック

1. 研究計画の概要

本研究は、看護系大学と臨床が連携し、近年の小児科医の不足や小児医療の課題となっている現象に対し、現小児看護専門看護師（Certified Nurse Specialist, 以下 CNS）の役割や職責を現法の中で広げ、独立した高度実践看護師クリニック（仮）を現医療体制に位置づけ、効果を検証する臨床研究である。

(1) 研究目的

- ・病院/在宅/地域に存在する医療ニーズに対応するために、CNS が単独または外来看護師と共同して行う看護外来に関する開設・運営のプロセスを明らかにする
- ・看護外来の効果を検証する
- ・看護外来を開設運営するに当たって必要な CNS のケア技術や役割を明確化すると共に、彼らを効果的に活用するための医療・教育体制の明確化

(2) 研究方法

（使用する研究データ及び分析方法）

本研究は以下の3つより構成されている。

①看護外来の開設・運営のプロセスを明らかにする

CNS は共通指標「APN 活動計画で明確化していく内容」を参考にし、独自の看護外来開設に向けての計画及び運営のプロセスについて、明確化していく。

研究者（CNS）自身の実践活動の分析内容の記録と指標に基づいて行った具体的活動内容の記述的記録を基に、内容を分析し、構造化する。

②看護外来の効果を検証する

研究者（CNS）自身によって共通用紙「CNS が運営する看護外来で CNS が看護介入を記録する記録用紙」に記録された内容（診療に関

する記録、医療・診療の質の改善に関する記録）を分析する。また、患者（健康管理スキル尺度、満足度）・家族（満足度）・他職種（満足度）にアンケート調査を実施した結果を統計処理にて分析を行う。

③看護外来の開設・運営に必要な CNS のケア技術・役割を明確化する

全てのプロセスにおいて、CNS の実践内容（共通用紙「CNS が運営する看護外来で CNS が看護介入を記録する記録用紙」に記録された記録内容、ミーティングの記録、研究者会議録、患者・家族の診療に関する記録・実践のプロセス）を内容分析し、高度実践看護師に必要な技術、小児医療・教育体制について検討する。

2. 研究の進捗状況

①看護外来の開設・運営のプロセスを明らかにするプロセス

それぞれの CNS が今までの自身の活動内容を分析したものを基に、外来を開設に向けて計画立案し、交渉・調整を行っている。調整が難航している施設もあるが、一部の CNS については、外来を開設し、運営を行っている。実践内容についての記述的データ分析には至っていないが、開設・運営のプロセスを実践中である。

②看護外来の効果を検証するプロセス

外来開設に至った CNS は、共通用紙を用い実践を記録し、アンケートの配布・回収を行っている。内容分析には至っていないが、実践を継続して行っている。

③看護外来の開設・運営に必要な CNS のケア技術・役割を明確化するプロセス

CNS の実践内容を検討した際、検査・診断

に伴う技術を実施する機会が少なく、また行った技術に併せて行う判断（アセスメント）を確認する機会も稀少であり、CNS 自身少なからず検査・診断に関するアセスメントの能力が不安であるという思いを抱いていることが明らかになった。実際、CNS 教育でもフィジカルアセスメントに関する教育内容に重点を置いたカリキュラムを実施している教育機関は少ないのが現状である。高度実践看護師として、看護の役割拡大を行い、独立した看護外来を開設・運営していくための能力として、小児のフィジカルアセスメントに関する知識・技術を強化していくことが重要課題である。そこで、APN 教育に精通した外国人講師（カリフォルニア大学サンフランシスコ校 Karen G. Duderstadt, PhD, RN, PNP）を招聘し、2回に渡り、講演、講義・演習の研修プログラムを実施し、CNS の知識・技術の向上を図っている。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている

（理由）

研究開始当初の新型インフルエンザの発生および、本年度の東日本大震災の影響により、医療現場に従事している研究メンバーは会議に参加する事も難しく、また施設での CNS の役割が変化し、外来開設・運営が難しい状況も出ているため。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 研究スケジュールについて

本年度の終了を目指し、以下の様にスケジュールを変更し進めて行く予定である。

平成 23 年 9 月末迄	データ収集
12 月迄	分析
平成 24 年 1 月迄	まとめ

上記予定を念頭に入れ、CNS の活動の状況を踏まえ調整を行って行く。

(2) データ収集について

看護外来の効果を明らかにする目的については、震災の影響による CNS の役割の変化から、外来での活動ならびに効果検証する為のデータ数を収集することが出来ない可能性がある。その場合は、量的データと併せて質的データを持って分析を進めて行く。また、外来開設・運営が難しい状況であっても、CNS の置かれている状況の変化とそこでの役割と必要となる技術について、質的に分析を行う事で、外来開設・運営だけでなく、CNS の求められているケア技術と役割の明確化という点で結果としていく。

5. 代表的な研究成果

現在の所特になし